

教育課程における家庭科学習内容の系統化

——ライフサイクルを軸に——

福田 公子 平田 道憲 貴志 倫子
小林 京子 高橋美与子 西 敦子

はじめに

今日の社会問題として取り上げられる「少子高齢社会問題」「環境問題」「国際問題」「消費者問題」「介護問題」をはじめ、「育児不安」「コミュニケーションの未熟」「体験や経験の不足」「生活文化の断絶」などの家庭生活問題群は、家庭科教育と深く関わっている。一方、平成14年度から施行された新教育課程では、週あたりの総時数が減少し、家庭科の標準時間数も大きく削減されている。そして新教育課程では、主体的判断のもとに「生きる力」の育成が提唱されている。これらの諸課題を考慮するならば、従来の家庭科の学習内容を組み替えることが急務である。そこで、本研究では、人間の生涯にわたり、加齢による発達と生活世界の拡大がみられるライフサイクルを軸に、小・中・高等学校の家庭科学習内容の系統化を図るカリキュラムを検討する。

1. 生活実践力の育成

家庭科は、かつては将来の家庭経営者の育成を目指して家庭生活を学習内容としてきた歴史がある¹⁾。平成元年の改定から性役割分業観は廃止され、家庭科は男女共学になり、家事労働と職業労働のいずれも男女の役割として責任を負うことになった。と同時に、各人のライフコースは自由に選択することが奨励されるようになった。この度の学習指導要領の改訂では、この傾向はますます顕著になり、男女の平等な家庭生活への参画と、自由なライフコースの選択が当然視されるようになってきた。

現行の家庭科の学習内容は、一部上述の部分が増加されたとはいえ、家庭経営者の育成を目指していた頃に構想されたものを引き継いで、家庭生活の充実と向上を目指した体系になっている²⁾。しかしながら、男女とも自由なライフコースを選択するようになると、各人が自分の生き方と関連した将来を見通した適切な意思決定ができ、選択したライフコースにおける生活

実践力が課題となる。意思決定は、生活実践力の一部であるとみなすならば、生活実践力こそ家庭科教育で育成しなければならない目標となるであろう。

生活実践力は、各人が生活場面にてより適切な行為を遂行できる能力を指している。人間の生活行為は、目的合理的行為・コミュニケーション的行為・開放的行為に分類することができる³⁾。目的合理的行為とは、家庭生活に限らず仕事やもの作りなどのような目的をもった作業において、ものの性質やそこに働く科学的な法則や技術的な合理性などを用いて、目的を達成する行為をいう。これまでの家庭科学習内容のほとんどはこれに関わる知識技術であった。コミュニケーション行為の基礎は、家族の濃密な人間関係の中で培われるとよい。集団で生活する人間は、社会スキルとしてもコミュニケーションスキルを上達させる必要がある。さらに、私たち人間は、未来に開かれた存在であり、常に現実の問題を批判的に思考しながら、新しい状況を開拓していく。例えば、前述の性役割分業観のような伝統的な枠組みも、そこから生じる偏見や問題状況を指摘して、考え方や社会的な体制を変革していく実践をしている。このような取り組みや新しい考え方に基づく行為を開放的行為という。以上のような考え方は未だ普及していないけれども、生活行為を類別することは、私たちの生活実践力を育成する場合に有用であると思われる。

図1は、現行の家庭科学習内容を生活実践力の育成を目標に組み替える場合の概念図を示している。現行の家庭科学習内容の構成を維持しながら、その中からどのようなライフコースを選択するにしても有用な人間にとっての永続的な関心事を重視する。生活実践力は、その学習者の現実世界において行為として遂行される。その行為に至る過程は、各人の内面において認知・技能・情意が内的統合されたから意思決定されて顕現すると考えられる。したがって、生活実践力は加齢とともに発達する部分や経験によって体得する部分

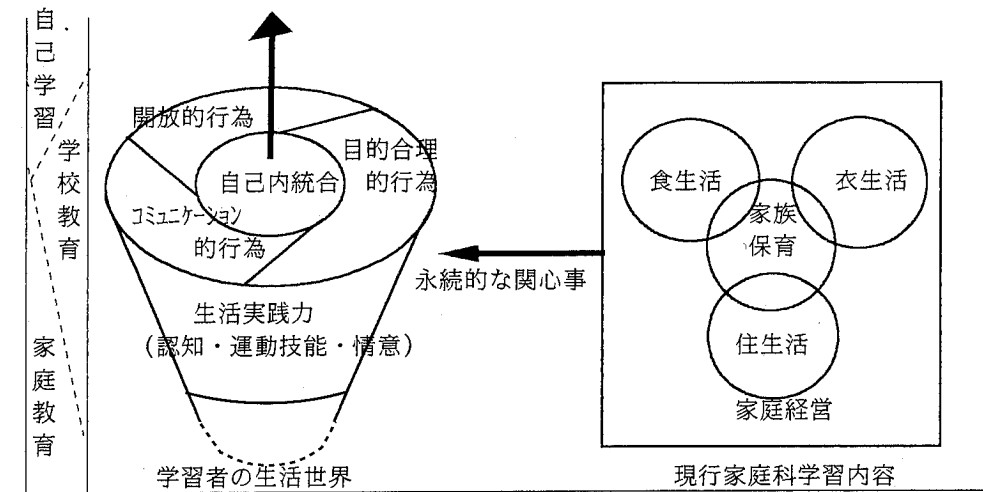


図1. 家庭科学学習内容の再構成試案

もあるが、家庭科の学習によって意図的に学習することが可能であると考えられる。

そこで、従来の家庭科学学習内容から、ライフサイクルを軸とした生活実践力の育成を視野において、新しい家庭科カリキュラムを構想する場合、学習者はすでに家庭生活においても個別に学習していることを考慮して、学校教育では小学校5年から高等学校の時期にどのライフステージの家庭生活内容をどのように関連付けて学習すれば効果的であるかについて構想する。中には、高等教育で専門的に学ぶ者もいるが、社会に出てからは、必要に応じて現実の中で自己学習（生涯学習）することを前提としている。このような複雑な関係にあることを考慮しつつ、以下、ライフサイクルとライフコースについて検討したうえで、小・中・高等学校の学習内容のカリキュラムを構想するものである。

2. ライフサイクルの考え方

2-1. ライフサイクルの段階

本研究の中心となるライフサイクルの考え方について、その概念を整理する。ライフサイクル(生活周期)は、生命をもつものが生まれてから成長し、活動期を経て老化に至る流れの変化を指す。すなわち、人の生涯にみられる繰り返しの現象に注目する考え方である。ライフサイクルのうち、とくに個人の生活の場を家庭中心にみると、家族を単位とする生活の周期的変化をファミリーサイクル(家族周期)とよぶ。

ライフサイクルを捉えようとするとき、まず問題となるのは、ライフサイクルをどこであるいは何によって区切るかである。区分は多様に考えられるが、区分

法には大別して等間隔区分法と段階設定法がある⁴⁾。等間隔区分法とは、例えば結婚を基点として、それ以後の経過を1年、5年、10年のように時系列により区分する方法である。これは、ライフサイクルが特定の段階に推移することを前提としがたいときに用いられ、漸次的推移を前提としたどちらかという機械的な方法である。これに対し、段階設定法は、出来事によるライフサイクルの段階的な推移を前提とし、文字どおり段階を設定する方法である。研究の対象により、前提とされる出来事は異なってくる。人の一生、あるいは特定の時期に焦点を当て、例えば結婚、出産、子の成長、子の巣立ち、退職などが区切りの出来事となる。段階設定法のもっとも古い例としては、ソローキン(Sorokin, P.A.)の農場家族の経済生活史をとらえたファミリーサイクルの4段階区分があげられる⁵⁾。こうした区切りによってうまれる、ライフサイクルのそれぞれの段階のことをライフステージという。

本稿では、学校教育における家庭科のカリキュラムを提示するという研究目的にあわせて、ライフサイクルを段階設定法に基づき、乳幼児期、児童期、青少年期、成人期、壮年期、高齢期の6つに区分してとらえることとした。誕生から義務教育入学前までを乳幼児期とした。児童期は、小学校の6年間、青少年期は、中・高等学校段階の6年間とした。この二つの区分は、学校教育年齢にあわせることにより、小・中・高の各段階における学習内容をとらえやすくする意図がある。成人期は、進路の選択、パートナーの選択を模索および決定する期間として想定した。壮年期は、進路の維持期、および次世代を育み、教育する期間とした。

さいごの高齢期は、第一線からの引退、人生のまとめ、死の準備期間として設定した。

2-2. ライフサイクル論と発達課題

次にライフサイクルの理論に深く関連している考え方にふれておく。ライフサイクルにおける各ステージにはそれぞれ達成されることが望ましい課題がある、とする発達段階理論である。発達段階は、生物学的、身体的、心理的、社会的側面などさまざまな要素からとらえられる。これらは独立して、あるいは全てが同時進行で発達するというものではなく、相互に影響を与えながら結びついている。

発達段階理論は、個人のライフサイクルを乳児期から老年期にいたる8段階に分け発達課題を提示したエリクソン (Erikson, E.H.)、アメリカの成人男子の発達パターンを4段階で示したレビンソン (Levinson, D.J.)の研究が著名である。発達段階理論は、教育にも深く関わっており、例としてピアジェ (Piaget, J.)の認知能力の発達理論があげられる。他に、生涯教育の必要性を理論づけたハヴィガースト (Havighurst, R.J.)は、幼児期、児童期、青年期、壮年初期、中年期、老年期の6つの段階ごとに課題を示している。

エリクソン、ハヴィガーストの理論は、誕生から死に至る生涯のライフサイクルを説明している。レビンソンやピアジェのように、主として中年期の発達や乳児期からおおよそ青年期までの認知能力の発達など、人生の重要な部分に焦点をあてた理論も多い。いずれにしてもこれらの発達段階理論が、ライフサイクル研究にあげた影響は大きい。発達段階理論によって、さまざまなライフステージにおける課題が明らかになり、人生の危機に対する認識が深まるなど、人生を理解するうえで有用な視点が提示されたのである。

半面、発達課題の考え方は、「課題を立派に成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になってくる」⁶⁾という前提を内包する。これは、ライフサイクル論が、例えば家族のライフサイクルは結婚すれば子どもを産むもの、夫婦は生涯添いとげるもの、といった連続性を暗黙の了解として段階の設定をし⁷⁾、そこからはずれた生き方を暗によしとしない発想を生むことにつながる。ここに、生活を一定の構造やスタイルとしてとらえることの限界が指摘されるようになり、より多岐多様な実態をとらえようとするライフコースの視点が生まれてきた。

ライフコース (人生行路) は、個人が年齢別に分化した役割と出来事を経つた道と定義される⁸⁾。

すなわち、就職や結婚という人生の節目の選択がいかなるものであれ、そのたどってきた道をひとつの生き方としてとらえる視点である。ライフサイクルの考え方が1930年代には確立したのに対し、ライフコースの語が慣用化されたのは1970年代である。比較的新しいライフコースの考え方は、多様化の様相をみせている現代人の生き方、家族関係をとらえるうえで重要度を増している。

2-3. 家庭科教育におけるライフサイクル論

ライフサイクル論とライフコース論を家庭科教育の狭義の学習内容に関連させて考えると、どちらも欠くことができない。二つの概念を直接的に扱うのは、主として家庭経営、生涯生活設計の分野である。具体的には、ライフサイクルに沿った個々のステージで問題となりうる、結婚や性、保育、老いや介護にかかわる諸問題について学ぶ内容がある。ここで、これらの事象は、全ての児童・生徒が経験することになるとはかぎらないが、社会を形成する一員として自分の選択に関わらず共通に学んでおくことが望ましい。それは、自分自身の選択を考えると役に立つだけでなく、自分の家族を理解することや、社会で出会う他者の理解にも役立つと考えられるからである。実際の選択にあつては、さまざまなライフコースが考えられ、いずれの選択も基本的に尊重するのが家庭科教育の姿勢である。学習内容としてのライフサイクルとライフコースは、切り離すことができない概念である。

しかしながら、本研究は家庭経営、生涯生活設計の内容だけでなく、家庭科教育の学習内容全体をライフサイクルにそって再考することを目的としており、そのためには、いったんライフコースの考え方を脇におく必要がある。それは、ライフコースが、その多様性を提示するという特質ゆえに、学習内容構成には適さないと判断されるからである。もちろん、多様なライフコースに沿った学習内容の選択肢を設けることは不可能ではないが、それでは、授業時間削減の現状をふまえた内容を精選するという研究目的そのものを揺るがしかねない。ゆえに本研究では、ライフサイクルを軸とし、設定したライフステージごとの学習内容を発達課題に即して設定する方法をとることとした。

3. ライフステージ別の発達課題

ハヴィガーストは、発達課題の概念が教育者にとって役立つ理由を二つ指摘している。すなわち、学校における教育目標を発見し設定することを助ける点と、教育的努力を払うべき時期を示す点である⁹⁾。本節では、この考え方をもとに、われわれの提示する家庭科

の学習内容の到達目標を明確にするため、設定した6つのライフステージに沿った一般的発達課題を整理する。本研究では、とくに生涯の発達課題を示しているハヴィガースト、および生涯にわたる個体発達分化の図式を示したエリクソンの提言を参考としまとめることとした。

まず、それぞれの発達課題の特徴について簡単に述べる。ハヴィガーストは前述の6つのライフステージにおいて、ステージごとに9から10の課題を提示している。これらの課題は、発達課題の3つの規定要素をまんべんなく含む内容となっている。その3つとは、①身体的な成熟という生物学的条件、②文化的な価値観の体系や社会的な要求から生じる文化的条件、③人格や自我をつくっている個人的な価値観や抱負という心理学的側面である¹⁰⁾。②については文化、社会、および時代によって変動することになる。

エリクソンの提示した個体発達分化の8段階の課題は、個人の発達だけでなく「相互性」の概念に示されるように他者との関係性の視点があるところが注目される点で、とくに成人期の発達の研究に理論的基礎を与えるものとなっている¹¹⁾。

表1は、以上の二つの研究をもとに、6つのステージごとに筆者がまとめた発達課題である。なお、ハヴィガーストの示すステージは、本研究の枠組みとなるライフステージにほぼ合致しており、エリクソンについては、幼少期を乳児期、幼児初期、幼児期、学童期と

細かく分類しているが、本研究では、乳児期と幼児初期を乳幼児期に、幼児期と学童期を児童期と考えることとした。各ステージにおける発達課題は、家庭科教育の学習内容構成を念頭に置いているため、身体的な発達、心理的な発達に加え、日常生活レベルで必要と考えられる発達課題が含まれる。そして、自己の発達のみでなく他者との関係性に関連する課題をあげていることも家庭科を意識しての視点である。

次項では、それぞれの発達課題をふまえて家庭科学習内容を検討してゆく。すでに述べたように、ライフサイクルを軸とした学習内容を構成することの意義は、第一に、児童・生徒が、現在の成長段階における自身の達成課題を理解し、自ら歩む道、あるいは歩んできた道を理解することにある。第二に、ライフサイクルを追うことで、学習者自身の家族に対する理解を促すことにつながる。そして第三の意義は、学習者が社会生活を通して関わることになる他者を理解するのに役立つことにある。例えば、学習者自身が、専業主婦(夫)や非婚を選ぶというライフコースを考えると、青少年期の「職業選択に向けた準備」、成人期の「パートナーの選択」「職業に就く」という発達課題については、全ての人が同時期に、必ず達成しなければならない、とはいえない面がでてくる。このことは、しかし、学習内容の構成を前提とする本稿においては、以上の意義により解釈できると考える。

表1 各ライフステージにおける発達課題

ライフステージ	一般的発達課題
乳幼児期	基本的生活習慣の獲得、社会的生活習慣の獲得、信頼性の獲得
児童期	普通の遊戯に必要な身体的技能の学習、日常生活に必要な概念の発達、学習の基礎的能力の発達、勤勉性の獲得、共感と協力
青少年期	個人としての社会的役割の学習、自分の体の構造を理解し有効に使う、男性・女性としての社会的役割を学ぶ、パートナーとの交際を学ぶ、結婚・家庭生活に向けた準備、職業選択に向けた準備、家族や他の大人からの情緒的独立、アイデンティティの確立、行動指針としての価値や倫理の学習
成人期	職業に就く、ライフスタイルの模索、他者との親密性、パートナーの選択、市民的責任を負う、適した社会集団への所属
壮年期	市民的・社会的責任の達成、ライフスタイルの確立、次世代の育成、生理的变化の受容と適応、年老いた親への適応
高齢期	肉体的な力への適応、社会的役割の変化(現役からの引退)への適応、社会的・市民的義務を引き受けること、人生のまとめ(統合性)、死への適応

4. ライフサイクルを視点とした家庭科の学習内容の構想

4-1. 小学校の家庭科学習内容

小学校高学年の時期は、家族や大人の保護を受け、多くのことを周囲に依存していたそれまでの生活を脱して、自らの身の回りの自立に目を向け始める時期である。家庭科の学習が始まるのを機に、家族との関わりの中で自分をとらえ、家庭生活に関心を持つとともに、家族とは何か、よりよい家庭生活のために自分はどうあるべきか考えられるようになる。そこでこの期の学習は、ライフステージとして自らが位置する児童期に焦点を当てる。

児童期の生活課題の解決に向けた学習内容は、二つの視点で構成される。その一つは、家族の触れ合いを中心に周囲の人との関わり深めることを意図した視点からなされる学習である。家族や周囲の人のために自分ができることは何か考え、よりよい家族の生活を目指して生活実践を試みるものであり、以下の内容が示される。

- ①家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることがわかり、自分の分担する仕事を工夫することができる。
- ②生活時間の有効な使い方を考え、家族のための朝食作りなど、触れ合いの時間を増やすために家族に協力することができる。
- ③家族の生活を便利にしたり楽しい雰囲気を作り出し

たりするために、家族の交流に役立つ小物を製作し、活用することができる。

- ④家族が楽しく気持ちよく過ごせるように住まい方を工夫することができる。
- ⑤近隣の人々との生活を考え、自分の家庭生活について環境に配慮した生活ができる。
今一つは、自らの自立した生活を目指す学習であり、その内容を次のように示すことができる。
- ①衣服に関心をもつとともに、ボタン付けや洗濯、手縫い、ミシン縫いなどの衣生活に関わる基礎的な技能を習得する。
- ②日常の食事に関心をもつとともに調和のよい食事の取り方がわかる。
- ③洗う、切る、ゆでる、炒めるなどの調理の基礎的な技能を習得する。
- ④住まい方に関心をもつとともに、身の回りの整理整頓や清掃の工夫ができる。
- ⑤身の回りのものや金銭の使い方を考え、適切に買い物ができる。
- ⑥環境に配慮した生活の必要性がわかり、解決を図ることができる。

以上のように、触れ合いと自立の両面から学習内容を構成し、ライフステージとの相関をまとめた。

なお、小学校では、児童の実態に応じて弾力的な指導を可能にするため、内容は表2のように2学年をまとめて示すこととする。

表2 小学校5, 6年生の家庭科学習内容

領域 ライフ ステージ	衣生活	食生活	住生活	家庭経営	保育	家族/家庭生活
児童期	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 日常着の着方 衣服の手入れ 生活に役立つものの製作 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 食品の栄養的な特徴 1食分の組み合わせ 簡単な調理 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 身の回りの整理整頓 掃除のしかた 快適な住まい(保温, 換気, 照明) </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 計画的な買い物 環境に配慮した生活 ゴミ騒音 </div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 家庭の仕事と協力 家族との触れ合い 生活時間の使い方 </div>

4-2. 中・高校生の家庭科学学習内容の構想

中学生は、自らの身の回りの自立や家族に支えられた生活が中心であるため、ライフステージとして青少年期にスポットを当て、この時期の生活課題とその解決に向けての学習内容とする。高校生は、いよいよ成人として自立していくことを目前とする時期であり、青少年期に止まらず、将来に向けてライフコースを定め、新しい家庭・社会環境の中へ巣立つ準備時期でもあるため、各ライフステージの生活課題を視野に入れた学習内容とする。

そこで、青少年期（中・高校生）の学習領域の主軸

を発達段階に応じて、次のように定め系統立て構想化してみる。

中学1年生は、家族・家庭生活領域を中心に

- ①日々の生活を快適に過ごすために家庭内で行われている仕事を考え、家族が共に家庭生活をする中で、支え合い助け合うことを目指して、自分たちにできることを分担協力し実践する。
- ②実践する中で、家族とのコミュニケーションを図りつつ、衣・食・住に関わる生活文化や生活の知恵の継承と共に、家族の絆の大切さを実感する。

表3 中学校1-3年生の家庭科学学習内容

領域 ライフ ステージ	衣生活	食生活	住生活	家庭経営	保育	家族／家庭生活
青年期	中学1年生 被服整理 せんたく・ アイロン掛け 小物の製作		家庭内の美化 整理・整頓 清掃 装飾	家庭生活と 消費 賢い消費者 としての姿勢		家族・家庭生活 での分担協力 家族との関わり
	中学2年生	食生活 食物と体 成長期の栄養 日常食の調理 食材の特質 基礎的技術 食事マナー		表示の意味 ・見方 食品の選択		食事作り 家族との関わり 食文化の継承
	中学3年生		健康的な住まい 住まいの機能 衛生・安全・ 能率的な住まい 地域の環境 バリアフリー			住空間と 家族関係

表 4 高校生の家庭科学習内容

領域 ライフ ステージ	衣生活	食生活	住生活	家庭経営	保 育	家族／家庭生活
乳幼児期					心身の発達の特徴 の理解 関わり方 環境整備	
児童期						家族・親・大人と しての対応の仕方
青少年期	生活的自立を目指す 主体的な選択・処理 責任ある行動 科学的理解と認識			資金計画 教育費		自立に向けて自己の 生き方の模索 進路決定 将来に向けての生活 設計
成人期	自立 ホームプロジェクトの実践により，家族・家庭生活の改善向上への手段や方法を学び 身辺処理及び実生活への関心高めると共に，今後に向けて日々改善向上していく姿勢を培う					
	自立 生活的自立 精神的自立 経済的自立 関係的自立					ライフコースを決め その準備

<p>壮年期</p>			<p>自己の結婚、子どもの保育・養育費や教育費の計画・準備</p>	<p>生活設計に基づく住生活様式の検討や経済的準備の必要性を理解し、準備</p>	
<p>高年齢期</p>	<p>高年齢期の食事</p>	<p>バリアフリー住宅</p>	<p>住意識に基づく高年齢期のための住生活の準備や老後の生活費の準備</p>	<p>子どもの教育・しつけについての基本的方針</p>	<p>子どものしつけ・教育への関わりコミュニケーションの大切さ 子どもの支援 老後の生き方を決め準備</p>
<p>高年齢期</p>			<p>老後の生活費</p>		<p>老後の生き方 生き生きとした生活 再就職、ボランティア活動、地域との関わり 家族との生活をどうするか 介護について</p>

中学2年生は、食生活の学習を中心に

- ①食物と体の関係を理解し、「食」を考え直すきっかけとする。特に、成長期における食の意義、望ましい食生活のあり方を学習する。
- ②日常食に利用される主な食材の特性を理解し、その特性を生かした上手な活用法を学習する。
- ③日常食の調理実習を通して、調理の基礎的技術・会食の楽しさ・食事マナーを体得していく。
- ④家庭で家族とコミュニケーションを図りながらの実践を通して、食文化や家庭の味を継承する。

中学3年生は、住生活の学習を中心に

- ①住まいの機能を学び、「住」に対する価値観形成の観点を考える。即ち、住生活のあり方が家族関係や人間形成と関わりが深いことを考える。
- ②安全面・衛生面に配慮した健康的な住まいについて科学的に認識する。
- ③屋内環境のみならず、屋外や地域との関わり、さらに地球規模での環境問題やエネルギー問題について考える。
- ④いろいろな立場の人たちと共生共存する社会の中で、バリアフリーの視点に立った環境整備や住まいへの配慮を考える。

高校生は、

- ①自らの自立や、将来に向けて自らの生き方を想定（生活設計）し、ライフスタイルに応じた課題を考え進路決定の参考とする。
- ②いずれのライフスタイルを選択しようとも共生共存する社会の中で、結婚し親としての立場のみならず、一人の大人としての立場から、人と人との望ましい関わり方、環境整備をしていく姿勢を培う。
- ③将来を見通した生活設計の実現に向けて、青少年期に心積もりしておくことは何か考える。

以上のような点をもとに青少年期（中・高校生）の家庭科学習内容をライフステージと学習内容との相関でまとめたものを次の表3、4に示す。

おわりに

家庭科の学習内容を生涯学習の観点から、ライフサイクルを軸に系統化することを試みた。現行の学習指導要領の学習内容を踏まえながら、学習者が各自のライフコースをいかに選択し、各ライフステージにおいて生活実践が可能になるように、小・中・高等学校において家庭科カリキュラムをどのように組み直すべきかについて考察し、その結果を提示した。その考え方の中核として、生活実践力を試案しているが、その定義や構造は未だ一般に認知されたものではない。生活実践力は自分の生活を把握して、推論や判断をして必要なスキルを用いて適切な生活行為をするという複合的な能力である。その認知的領域ともいえる生活実践知については、研究や教育実践が進展しつつある。それらの研究成果を援用して、本研究で構想した家庭科カリキュラムを授業実践することが次の課題である。

<参考文献>

- 1) 安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』けい草書房 1999
- 2) 日本家庭科教育学会編『家庭科の21世紀プラン』家政教育社 1996
- 3) 林未和子『現代アメリカ家庭科カリキュラムに関する研究—生活実践知—』風間書房 2002
- 4) 森岡清美編『現代家族のライフサイクル』培風館 1977, p.6
- 5) 同上 p.7
- 6) R.J. ハヴィガースト（莊司雅子監訳）『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部, 1995, p.25
- 7) 森岡清美「ライフコースの視点」『ライフコースの社会学』岩波書店, 1996, p.6-7
- 8) 青井和夫, 森岡清美編『現代日本人のライフコース』日本学術振興会, 1991, p.2
- 9) R.J. ハヴィガースト（莊司雅子監訳）『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部, 1995, p.28
- 10) 同上 p.27-28
- 11) 岡本祐子「ライフサイクルからみた自立と共生」『人間生活学』北大路書房, 1998, p.16-17